

further lower temperature (2°–5°C) in darkness. Such germination condition inevitably suggests the limited distribution of this species.

On the other hand, *E. patrini* was a “simple” light germinator, besides its optimum temperature for germination was of wide range, 15°–30°C. The maximum germination rates were obtained in two ways; by a single exposure to light for 24 hrs and by four times of intermittent irradiations each composed of 1/4 hrs. The germination condition being of such a wide range this kind of plant is distributed widely in the whole country. They grow in fields as well as in sunny mountainous districts.

引用文献

- 1) S. Isikawa and T. Oohusa. Journ. Jap. Bot. **37**:374–382 (1962).
- 2) S. Isikawa and T. Ishikawa. Plant and Cell Physiol. **1**:143–149 (1960).
- 3) T. Fujii and S. Isikawa. Id. **2**:77–86 (1961).
- 4) 藤田安二. 生物科学 **11**:165–168 (1959).
- 5) G. Gassner. Ber. Deut. Bot. Ges. **33**:203–217 (1915).
- 6) J. Wiesner. Sitzungsbs. Akad. Wiss. Wien Math. Naturwiss. Kl. Abt. 1. **103**:401–437 (1894).
- 7) Toole, E.H., Toole, V.K., Borthwick, H.A. and Hendricks, S.B. Plant Physiol. **30**:15–21 (1955).
- 8) S. Isikawa. Jap. Jour. Bot. **18**:105–132 (1962).
- 9) S. Isikawa. Bot. Mag. Tokyo **68**:173–179 (1955).
- 10) S. Isikawa and Y. Yokohama. Id. **75**:127–132 (1962).
- 11) S. Isikawa and Y. Yokohama. 未発表.

□中国植物志第2巻 中国植物志は中国科学院中国植物志編集委員会(銭・陳両氏主編)の編さんになるもので、中国全植物の種類・分布・用途などを系統的に記述し、もって自然利用と改造の基礎資料、豊富な植物資源の利用ならびに教育研究に役立てるものであるという。北京の科学出版社発行。全80巻、1959年からはじめて8~10年で完結予定。種子植物とシダ植物に限っているが将来は藻菌・菌類・コケ類などにも及ぼしたいと。第1巻は未刊、総論として系統や分布論も載るはず。第2巻がまず出たが(1959)これはシダ植物の一部ハナヤスリ科からツルシダ科まで、B5版406ページ、この調子だとシダ植物だけであと6冊は出そうである。私も翌年手に入れたが、なかなかいい本である。門から種まで植物群の記載・検索表・文献・分布などを詳しく、各部にはりっぱな図、新種のラテン文記載は巻末にまとめてある。この巻の編集には世界有数のシダ学者秦仁昌氏が当たっており、彼の分類系を使うと書いてあるが1940年のウラボシ科を非常に細分する分類系と多少ちがっている。中国は世界で最もシダの豊富な地域の一つで2000種以上あると書いているが、この本では物すごく種類がふえている。たとえばリュウビンタイ属62種(内今回の新種43)、ホソバコケシノブ属21(12)、フモトシダ属59(31)など。これは研究工作在植物調査にも及んできた結果だと考えられるが、まことに驚異的な数字である。その上興味あることは、これらの新種の大部分が雲南省に集中していることで、リュウビンタイ属の新種43のうち29が、フモトシダ属では31のうち22が同省から採集され、広西・広東・海南島・台湾などはぐんとおちている。昔から雲南はシダの豊庫だといわれているが、植物地理学上からも分類学上からも大いに探検調査されるべき地方であることを感じる。(伊藤 洋)